私の知っている平和とは

第二小学校　四年
土屋　美來

私は、「平和」というものを知りたくて、二冊の本を借りてきました。その本の名前は、『ヒロシマのピアノ』と『かわいそうなぞう』です。私は平和について考えながら、本を読みました。

一冊目の本『ヒロシマのピアノ』は、原子ばくだんを落とされた広島のとある一家の話です。ピアノをずっと大切にしていた女の子が、原子ばくだんを落とされぼろぼろになったピアノを死ぬまで大切にしていました。そのピアノは、「ひばくピアノ」として、今でも市民達に愛されています。この本を読んで、ぼろぼろになっても、持ち主の愛と平和を願う心があったからこそ、「ひばくピアノ」として今も愛され続けているのだなと思いました。

二冊目の本『かわいそうなぞう』は、空しゅうがあった上野の動物園の話です。空しゅうでばくだんが動物園に落とされると、おりがこわれて、ライオンなど、きけんな動物がぼう走してしまいます。そのため、し育員の人達は、仕方なく動物に毒を飲ませてころしてしまいました。最後に残った三頭のぞうには、毒がききませんでした。なので、最期には食べ物をあげず、死んでしまいました。し育員の人達は、それが悲しくてたまりませんでした。空しゅう用の飛行機にむかい、「戦争をやめろ。」とうったえて本は終わります。この本を読んで、人と同じく動物の命もとても大切で、本当は生きられるはずなのにころさなければならず、命ははかないものだと分かり悲しくなりました。

この二冊を読んで、私の思いえがいていた日本とは大きくちがっていました。日本は今も昔も平和な国だと思っていたけれど、昔は戦争や悲げきがあったことを知りました。今の日本は、国同士の争いに参加せず、平和を願い続けています。戦争にあっている人達に、衣食住や医りょうの支えんを行っています。もし戦争がなかったら、日本人は戦争のこわさを知らず、今でも戦い続けていたかも知れません。戦争の経験があったからこそ、戦争を反対することが出来ていると思います。戦争や原子ばくだんで、多くの人や動物が命を落としました。今が平和なのは、命を落とした人達の生きていてほしいという願いがあるからだと思います。そして、戦争をせず、命を大切にしているからだと思います。

今後、私が平和のために出来ることは、まずは身近な所での争いごとを、ぼう力ではなく、しっかり話し合い、おたがい不満が残らないような答えを見つけだせるよう、声をかけていけるようになることです。未来まで今の平和と幸せが続くように、自分のまわりからハッピーになれるよう、がんばりたいです。

特攻隊はお兄さん

第三小学校　六年
安藤　凛

泣きたくなりました。泣くのをがまんしていたら、のどのおくがぎゅっとしまるような気がして苦しくなりました。家族と見ていたテレビで、特攻隊のことを初めて知りました。戦争のことについては、これまでに学校の授業で習ったことがあったけれど、自分よりずっと大人で、お父さんぐらいの年の人たちが戦ったのだと思っていました。ですが、特攻隊の人たちの写真を目にすると、そこには、私よりも少し年が上のお兄さんたちが写っていたのでおどろきました。子犬をだいて優しい笑顔をうかべていたお兄さんたちが写っている写真は、出げき二時間前に撮影されたそうです。子犬を優しくだっこするお兄さんたちが、自分で飛行機をそう縦して、日本のためにと敵の船に、飛行機ごと体当たりをして命を落としてしまったことを知り、私はとても悲しい気持ちになりました。お兄さんたちが出げきする前に家族に書いた手紙を読んでどうしてこの人たちが死ななくてはいけなかったんだろうと、くやしくなりました。

「笑ってゆきます。」
「お身体お大事に。」
「皆様、お元気で。」
「俺が死んだら何人泣くべ。」

お兄さんたちは、どんな気持ちでこの手紙を書いたんだろう。自分や自分の家族が、お兄さんたちのように出げきしなければいけなくなったら、心がこわれてしまうかもしれません。戦争なんてなければいい。絶対にくり返してはいけない事だと私は強く思いました。

平和作文を書くときに、お母さんと戦争のことや平和についてたくさんたくさん話しました。なぜ戦争が起こるのだろう。どうしたら平和に暮らせるのだろうと考えたときに、私は、自分の考えを人におしつけず、相手の立場になって考えてみることも大切だと思いました。自分だけがよければいいとみんなが好き勝手に行動してしまえば、悲しい戦争がまたくり返されてしまいます。私がふ段通りの毎日を送っていたら、命の重さについて考えることは、きっとなかったけれど、お兄さんたちに起こった出来事や、お兄さんたちが出げき前に残した手紙を目や耳にして、当たり前にあると思った命の重さについて考えることができました。

平和は、一人でがんばって作るものではなく、みんなで思いやって協力し、守っていくものだと私は思います。自分の命がなくなる直前に、家族を思いやる手紙を書いたお兄さんたちのことを忘れずに、私も人を思いやる心を大切にして生きていきたいと思います。

戦争のない社会へ

第三小学校　六年
伊藤智美

私は夏休みに明治史料館の戦争史跡めぐりに参加しました。沼津市内の色々な場所に行き、戦争にまつわるお話を聞かせていただきました。私の印象に残っている場所は、御成橋です。そこにはばくだんが落とされたあとのくぼみが残っています。沼津はたくさんの空襲を受けています。そのほとんどは、他の場所で使ったばくだんの残りをごみすてのように落としたものです。そのばくだんで何万人の人が死んだことかと考えるとおそろしくなります。

また、我入道の都立沼津戦時疎開学園も印象に残っています。普段は入れないところに特別に入らせていただき、当時疎開していた子どもたちが生活していたお部屋を見ました。一部屋に二十人ほどが暮らしていたらしいのですが、二十人も入れるのか疑うくらいせまい部屋だったので、おどろきました。そして、紹介してもらった場所が私にとって身近な場所で、戦争の足跡はすぐ近くに残っているというのが、しょうげき的でした。

このイベントで聞いたのは主に太平洋戦争のことでしたが、その後もたくさんの戦争が起こっていて、いまだに続いています。

戦争の体験をえがいた本を読んだことがあります。その本は、子どもがたくさんいる家庭のお母さんが、兵士として戦場に行き、帰ってきたものの、病気で寝こんでしまったお父さんの分まで子育てをするというもので、直接戦場に行かなかった人々も、つらい生活をせざるを得なかったのだと知りました。

今起こっている戦争でつらい生活をされている方々は、（なんでこんなことに）と思っていると思います。全く罪のない人がぎ牲になっていると思います。

私は、日本という国が戦争をしていない今の時代に生まれて、恵まれていると強く思います。そして、今起こっている戦争が終わり、今後も戦争のない国際社会になってほしいです。

今地球は温暖化などの深刻な問題を抱えています。各国の存在を認め合い、問題解決のために、協力しあい、みんなで豊かな生活をしていきたいと思いました。

最後に、案内して下さった明治史料館の職員の方々にお礼の言葉を伝えたいです。

ありがとうございました。

戦争の歴史とこれからの平和

第三小学校　六年
庄司　海羅

一九四五年八月十五日、長期にわたった第二次世界大戦が終戦をむかえました。この戦争によって日本は多くの被害を受けました。それは、ぼくの住む沼津市も同じです。ぼくは、この夏休みに沼津市で戦争の歴史がどのように残されているのかを調べてみることにしました。

まず一つ目に、おなり橋の空しゅうあとを見に行きました。おなり橋には、一九四五年四月十一日のアメリカ軍の空しゅうによって受けたきずあとが残っています。今まで何回も通った橋だったけれど、固い鉄の柱に大きなへこみがあってさわってみると、すごく固いものが変形していることが分かりました。そして、七十七年前の戦争の被害が今も残っていることに戦争って本当にあったんだと思い少しこわくなりました。

そして二つ目は、我入道にある旧東京都立沼津戦時そかい学園です。ここは、戦時に東京都赤坂区の児童約百二十人が親元をはなれそかい先として利用していた場所です。また、一九四五年十二月から一九四七年三月までの間は、東京大空しゅうで家を失った児童たちを収容する「戦災時学園」として運営されていたそうです。沼津市でも空しゅうを受けたと聞きましたが、その沼津市にひなんする子供たちがいたということは、東京ではもっと大きな被害があったのだと思います。

このように、身近な場所にある戦争の歴史を見るだけでも自分の住む地いきにも戦争の歴史がいくつもあることが分かりました。これは、戦争によって苦しみや悲しみを受けた人たちが自分の住む地いきにもたくさんいるということです。

今、日本は戦争をしていませんが、世界ではウクライナとロシアが戦争をしています。日本が戦争をしていなくても、世界のどこかでは今日も戦争をしているのです。

ぼくは、どうすれば戦争のない平和な暮らしができるか考えてみました。まず、なぜ戦争が起きてしまうのか、それは、人の考え方のちがいによって生まれる争いや領土をめぐって生まれる争いなどによって、戦争が起きてしまうことが多いように思います。次に、どうすれば戦争をなくせるか、それは、地球人みんなが、みんなの幸せを願えばなくせると思いました。なぜなら領土などの戦争は、自分たちだけが幸せになり、みんなの幸せにはならず、苦しむ人が出てしまうからです。

そして、自分の国もとなりの国も遠くの国も、それぞれにおたがい思いやることが大切です。戦争で戦っている人たちにもみんな家族がいて、両親や子供たちがいるはずです。みんな、自分の家族や友達が戦争に行くことを望むでしょうか。

ぼくはこの夏休みに戦争について考えてみて、やっぱり戦争は絶対にやってはいけないと思いました。世界中の人々が安全で平和な生活ができる様に助け合いながら暮らしていける社会を作っていきたいと思います。

戦争はあってはいけない

第三小学校　六年
前原　湊人

学校で読む推せん図書に平和に関する本という項目があり、なぜ戦争をするのかや、戦争をなくすにはどうしたらいいだろうなどというのを知りたいと思い、このことについて調べてみました。

まず、なぜ戦争はだめなのかを調べてみました。一つ目は、理由もなく人が殺されるなんてあってはならないからです。人の人生は一度きりでやりなおすこともできません。それなのに理由もなく多くの人が殺されるというのは許されていいことではないのです。

二つ目は、殺した人も殺された人も幸せにはなれないからです。ただ、どこかの国が攻め込んできた時に何もないと一方的にやられてしまうので、国を守るために戦力は必要だと思います。

前にも書いたとおり、攻めるのは絶対にしてはいけないと思います。しかし、相手が攻めてきたときの自分の国を守るための防衛戦争も否定してしまうのは違うと思います。もし国を守るための戦いもしなかったら、たぶんですがもっと悲さんな結果になってしまうと思います。攻められた時に抵抗をしないで支配されるよりも、武器をとって全力で抗う方がいいと思います。

こんなに恐ろしい戦争は、そもそもなぜ起きてしまったのか調べてみました。

結論から言うと、平和的手段である外交で国と国の問題が解決できない時に、武力で決着をつけようとするのが戦争です。しかし、日本とアメリカの戦争では、アメリカから輸入していた石油をアメリカが輸出してくれなくなり、国が生き残るためにはアメリカと戦争するしかないと考えるようになりました。結果、日本はアメリカに敗北して大量の死者を出すことになってしまったそうです。

また、ヒトラーがユダヤ人を迫害したのは、戦争が起こったのをユダヤ人のせいにしたかったからだったんです。

このような戦争を起こさないために、自分ができることは何か考えてみました。自分が今、戦争はだめですよと言っても、世界から戦争がなくなる訳ではありません。けれど、自分をふくむ多くの人が伝えていけば、少しずつだとは思いますが、戦争がなくなっていくのではないでしょうか。

今、ロシアがウクライナへと侵攻し、ウクライナの人を苦しめています。そのような戦争が世界からなくなり、戦争の恐怖が消えることをずっと願っています。

平和のバトン

第三小学校　六年
山田　丞悟

みなさんは、第二次世界大戦を知っていますか。

戦争というのは、国の領土をめぐって国と国とが戦い多くの人々が犠牲になります。僕は本で読み、戦争について考えを深めて、みんなに伝えていきたいと思いました。

一九四五年八月六日の朝、日本の広島県に原爆が投下されました。その瞬間、目が開けられない程のまばゆい光と炎が広島の街を破壊し、燃やしつくしました。十万人を超える人々が亡くなり、その中には大勢の子供達もいたそうです。

そして八月九日、長崎県にも原爆が投下されました。その威力は、広島県に投下された原爆の、約一・五倍だったといいます。長崎県では、現在までに、約十六万人を超える人々が亡くなりました。長崎に投下された原爆は、爆風と熱線、放射線を放出し、長崎の街に、壊滅的な被害をもたらしました。投下後も放射線により、多くの人々が亡くなりました。

僕には、この光景は想像できませんでしたが、苦しくて悲しい気持ちになりました。

僕の住んでいる沼津市でも空襲の被害にあったそうです。七月十七日の一時十三分から二時五十二分まで約一時間四十分の間、計三十七万個の焼い弾、焼い爆弾が投下され沼津の街も火の海になりました。僕は、広島や長崎だけでなく、沼津なども空襲されたことを知っておどろきました。そして、沼津が空襲された理由は、攻撃の目標を日本の各都市とする市街地焼い空襲へと方針を変えたため人口が多い沼津が空襲にあいました。

僕は祖父に話を聞いてみました。沼津には、海軍技研や軍需工場があったそうです。その施設を壊すために投下したような気が僕はします。

実際に、戦争に行った人や原爆を体験した人々の声が今後聞けなくなるかもしれません。

僕は、多くの人々が犠牲になってきた戦争は、無くなった方が良いと思います。けれど、戦争を無くすことは、出来ないかもしれません。でも、なるべく戦争が起きないようにすることは出来るかもしれません。そうするには、国と国とで手を取り合い、助け合えば実現して平和な世界になってくれると僕は思います。そして、みんなが楽しく笑顔で暮らせる世の中になってほしいと思いました。

そして、僕達に出来る事として、インターネットが普及している今ならではの方法を使い、体験談などを発信したり、学校などで戦争について考える会などを行ったりして、僕達で後世に伝えていけばいいと思います。

平和をあきらめない

第五小学校　六年
稲毛優衣

「私は、小学校一年生の時に、戦争で右足を失っちゃったんだ。」こう話してくれたのは、岩下佳子さん、八十三歳の方です。

私は夏休みに、明治史料館で開かれた「小学生歴史教室」に参加しました。そこで、戦争を体験した岩下さんの戦争体験談を聞かせていただきました。私は、

（足がなくなるなんて、ひどすぎる！なんて悲しいことなんだろう。）

と、強い思いをもちました。

沼津市は、第二次世界大戦中の昭和二十年に、合計八回の空しゅうを受けました。その中で、もっとも大きな被害を受けたのが、七月十七日の「沼津大空しゅう」です。その時のことを岩下さんは、真けんな表情で話してくれました。

「焼い弾がふり始めてから時間が経つと、家も焼けて、外に逃げないといけなくなっちゃってね。外の建物も燃えて、空が真っ赤になってね。」

岩下さんが、悲しい顔をして話を続けます。

「何百人が防災頭巾をぬらし、それをかぶって逃げたんだよ。川に向かって飛び込めば燃えない。けど、焼い弾のかけらがいっぱい飛んできて、右足の小指にささっちゃったの。すごく痛くて、歩けなくなったの。」

病院に行ったけれど、結局、右足のひざから下を、切り落とさなくてはいけなくなったそうです。まだ小学一年の子供だったのに。こんな痛い思いをして、大変なことになってしまったと思いました。私が足の指を骨折した時でさえ歩くのが辛く、友達と遊べなかったり、大好きな体育の授業に参加できなかったりしたのが悲しかったです。岩下さんは、その何百倍以上も、きっと苦労してきたんだろうと、岩下さんの表情から想像できました。そして、何も悪いことをしていないふつうの人達が、たくさん傷つけられたことを知り、とてもくやしい気持ちにもなりました。私には、平和な日常がとつ然こわされるなんて、怖くて想像もできません。でも岩下さんは、右足を失った後も、あきらめずに挑戦し続けてきました。私も見習いたいと、強く思いました。

戦争をすると、皆が協力して築いてきた町や建物がこわされるだけでなく、人間も傷つけられたり、殺されたりしてしまいます。それは、絶対にあってはならないことです。意見や価値観の違いで対立しても、私は、相手を一方的に力でねじふせて解決したくありません。相手の立場に立ち、想像して、そういう考えもあると、相手の考えを受け入れることが大切だと、私は信じています。きちんと最後まで話し合って解決したいです。

砲台公園で見た砲台はさびついていて、しばらく戦争が起こっていない平和の証だと思います。砲台が今後、絶対に使われず、さびついたままでいることを願っています。

私が考える「平和」

第五小学校　六年
大宅心奈

世界中にはたくさんの国があり、そこにはたくさんの人々が生活しています。それぞれの国には、それぞれの言葉や文化があり、大切にしている伝統が根付いています。それをふみにじる行為が戦争であり、絶対にやってはいけないことと言われています。

では、何故戦争は起こるのでしょうか。私は子供なので政治のことはあまり分かりませんが、お互いが納得できるまで話し合うことや、相手が求めている物事を理解することが大切だと考えています。それは国に限らず、身近な家族や友人などでも、同じことが言えると思うのです。

実はこの前、私が通っていたバレーボールのクラブチームで、監督との意見のくい違いから、トラブルが起こってしまいました。それは、サーブのトスを片手で上げるか、両手で上げるかという考え方の違いから生まれました。監督は私に両手で上げてほしかったのですが、私は自分自身のこだわりから、片手で上げる練習をしていました。私は監督に自分の考えや気持ちを伝えました。結局、話し合いがうまくいかず、チームにいられなくなってしまった時、私は、(自分の気持ちを伝えなければ良かった。)と後悔しました。自分を理解してもらえないことが、こんなに悲しいとは考えていませんでした。逆に監督も、自分のやり方を理解してもらえず、悲しんでいたのかもしれません。

先日、母親と海外へ行く機会がありました。まず、飛行機に乗った時、機内食の種類の多さに驚きました。各宗教ごとに、細かく食事が分けられていました。スタッフの方に話を聞くと、調理の過程で食べてはいけないものが、絶対に混じらないように気を遣われているとのことでした。他人が生まれ育ってきた伝統から生まれた考え方や価値観を肯定するために、様々な心遣いや仕事が行われている、これはまさしく、他人を理解して認め、人に喜びを与える行為だと知りました。そして、訪問した国には、いろいろな人種がおり、長袖で肌を隠している人から裸に近い服を着ている人など、様々な人がいました。しかし、誰も人の格好や行動をあまり気にしていない様子でした。私も好きな格好をしていましたが、誰からも気にされていない、すなわち否定されていないということは、心地の良いことでした。

世界の人口は、八十億人に達すると言われています。様々な人種、宗教を信仰している人々が、狭い地球で暮らしていくには、自分と違っている人に配慮し、他人を尊重する、それが自分自身が尊重されることに繋がっているんだと思います。このような一人一人の心のもち方や行動の仕方が平和に繋がるのではないかと考えています。

私も、これからまた、人と意見が食い違う時が来るかもしれません。その時は、相手を尊重しつつ、自分の考えも大切にしたいと思います。これが私の考える「平和」です。

ぼくが見た戦争

開北小学校　五年
上村　悠人

八月になるとニュースでよく話題になる戦争。ぼくは、戦争についてあまり知りませんでした。原ばくが落とされ、たくさんの人の命がうばわれたのは知っているけれど、昔あったことくらいにしか思っていませんでした。平和について考えるきっかけになったのは、四年生の時に参加した「戦争史跡めぐり」です。明治史料館の人が分かりやすく教えてくれて、沼津でも実際に戦争があったことが分かるものがたくさんありました。焼い弾もたくさん落とされていて、おなり橋には、ばくげきによるきずあとが残っていました。へこんでいるのを見た時、そのい力におどろきました。とつげき隊基地跡もたくさん見ました。外側からだけど、中の様子も見ることができました。特攻を行う予定だったと聞いて、死ぬことを前提に敵を攻げきするということに、とてもショックをうけました。ふ段は見ることのできない戦時そ開学園も実際に中に入って見学することができました。小学生で親からはなれて集団で生活するなんて、ぼくは考えたこともありませんでした。明治史料館には、焼い弾のレプリカが天じょうからぶらさがっていて、どんな感じのものだったのかが分かりました。こんなものが空からいつ落ちてくるか分からなくて、いつもひ難することを考えて生活していたんだと初めて知りました。ぼくは戦争についてもっと知りたくなり、四年生の時に自由研究で取り上げ調べてみました。沼津だけでも、びっくりするくらい、いろいろな史跡が残されていました。調べれば調べるほど、今とあまりにも違う生活におどろきました。空しゅうにおびえることもなく、食べるものにも困らない、ゆっくり眠ることができる、ぼくにとっては当たり前のことが、どれだけめぐまれているのか良く分かりました。それでもまだぼくは、戦争は昔のできごとだと思っていました。

ロシアとウクライナの戦争が始まったとテレビで見た時、その映像におどろきました。ぼくが昔のできごとだと思っていたものが、テレビに映っていたからです。とてもきょうふを感じました。世界ではまだ平和になったわけではないんだと思いました。戦争は、たくさんの人をきずつけ不幸にします。少しでも早くロシアとウクライナの戦争が終わって二度と戦争がおこらない平和な世界になってほしいと思います。

平和への第一歩

片浜小学校　六年
笠井俐仁

ある晴れた夏の朝
ピカッ
ドーン
もうれつなばく風とばく音
ふき飛んでくる屋根がわら
ガラスの破片やガレキ
うめきながら苦しむ声
「熱い、熱い、水を……」
多くの尊い命がうばわれていった
なにを思って亡くなっていったのだろう

七十七年経った今
見上げる空は
青い
ぼくたちは
明日をむかえることができる

食べられる豊かさ
学べる喜び
会えるうれしさ
いくつもの幸せを
かみしめたい

人をきずつけてはならない
自分がされていやなことは他人にしない
当たり前のことが
戦争では通用しない
人々がきずつけ合う戦争から
なにが生まれるのだろう

地球上から核兵器がなくなったら
世界中のみなが
心から笑顔になるだろう
身の回りから広がる
小さな平和の輪
少しずつ大きくしていきたい

戦争と平和

金岡小学校　六年
諏訪部　麻　美

私が「戦争」と言われて思うことは、三つあります。

一つ目は、こわいということです。簡単に人をどんどん殺していくことがこわいです。さらに、平和な時は全く人を殺さず、優しかった人などが戦争を通してちがう人になってしまうのがこわいからです。

二つ目は、悲しいということです。例えば昔広島に落とされた原子爆弾で、何十万人もの人が亡くなりました。また、第二次世界大戦で生き残った人達や、関係のある人が平和記念式典で悲しそうにしているのをテレビで見ていて悲しくなるからです。

三つ目は、どうして戦争をするのかということです。普段人を殺すのは犯罪なのに、いざ戦争が始まると、人を殺すのが認められるのがおかしいと思うからです。

今の戦争と昔の戦争の違いを、三つ紹介します。

一つ目は、昔はなかったみんなが戦争で従わなければならない規則が今はあるそうで、「ジュネーヴ条約」とよばれる国際条約だそうです。そのジュネーヴ条約の内容は、簡単に説明すると、「戦争に参加しない人々や、もはや戦闘に直接参加することのできない人々を保護する条約」だそうです。ちなみに、一九四九年八月十二日に誕生したと分かりました。

二つ目は、情報量や情報速度などが速くなりました。昔は、情報速度がおそく、情報量が少なく、都合の良い情報しか流さなかったけれども、今はその日起きた事がすぐに確認できるようになっています。

三つ目は、昔は戦争に勝った国が正しく、正義とされていました。今は勝ったか負けたかということではなくて、世界のみんなが判断しているようです。だから勝ったから正義とは限りません。

私は、大きな戦争を経て、世界の考え方が変わったと思いました。戦争について関係のない人は無関心で済んでいたのが、今は関心や興味をもつようになってきているなと思います。

今起こっている、ロシアとウクライナについて深く考えてみました。私は前まで、ロシアが一方的にウクライナに攻めこんで、ひどいと思っていました。けれど、ニュースを見ているとロシアは気候が悪く魚も捕れず食物も作れないため、攻めこんだようです。でも、他の手段はなかったのでしょうか。

戦争があったから世界が発展して、今の世界や日本があるのかもしれません。でも、戦争に頼って発展させるのはおかしいと思いました。

日本は平和と言いきれるのか

金岡小学校　六年
友野　由菜

今、私たちが住んでいる日本は、戦争もない、平和な国です。たくさんの死者を出すこととなった、第二次世界大戦後、戦争はなくなっています。日本国憲法の第九条には、「永久に戦争を放きする」と書いてあります。

でも、本当に日本は平和なのでしょうか。戦争をすることは本当にないと、言いきれるのでしょうか。

まず、二〇〇四年に、日本はイラクへ陸上自衛隊を派遣しています。この時、イラクでは、戦争が起こっていました。

また、北朝鮮はミサイル実験を行っています。もし、そのミサイルが日本の国土に飛んできてしまったら、日本はどう守れば良いのでしょうか。

さらに、日本には、集団的自衛権というものが存在しています。これは、日本と密接な関わりを持つ国（例えばアメリカ）が攻撃されたときに、その国に協力して、武力を使うという権利です。

このことから考えられるのは、日本は、これから戦争をする可能性が十分あるということになります。これから、自分たちも、戦争に行って、戦わなくてはならない未来だってあるかもしれないということです。人を殺したり、殺されたり、そのような未来を望んでいる人はだれひとりいないはずなのに、戦争は起きてしまうのです。戦争は昔のことだから自分には関係ない、ではなく、むしろ自分たちのほうが関係しているといえます。では、これから戦争を起こさないようにするには、どうすればいいのでしょうか。

私は、戦争をしたくない、起こしてはならないという意思を強く持つことだと思います。けっして、周りが戦争するという雰囲気でも、戦争はしてはいけないとしゅちょうできる、強い意思を持ちたいです。このような意思が戦争のない平和な未来を作っていくと思っています。

私は、今まで日本は平和だ、すばらしい国だと思っていました。けれど、それはちがっていて、戦争をする可能性は十分あるということが分かりました。だから、戦争を昔のこと、他の国のことと思わず、自分たちに、ものすごく関係しているという気持ちが大切です。一度戦争について、考え直してみてください。

ロシアとウクライナの戦争

愛鷹小学校　四年
梶栗　颯栞

今、ニュースを見ると、

「ロシアがウクライナに、こうげきしています!!」

などと、そんなことがすぐに出てきます。私は、
（どうして？ロシアはなんでウクライナに対してこんなことするの？）
などといつも思います。きっと他の人もそんなことを思っているのだろうと、よく感じます。
　でも、ロシア人は、私とぎゃくのことを思っている人がたくさんいます。なので私はときどき、
「ウクライナ人がかわいそうだから、戦争はやめて！」
と声に出して言ってしまうので少し、はずかしくなってしまいます。でも、それに対してうそはないので、はずかしさがなくなります。
　そして、今ロシア軍によるウクライナへの侵攻が始まって約五、六か月がたちました。私は
（えっ!!もうそんなにたったの!!）
などよく思います。ウクライナ人はよく、五、六か月もたえていて、これからも、ロシアから、こうげきがくるかもしれないのに、すごいなあ、と思ったり、自分ならたえられないな、と思ったりもします。なのできっと日本人もウクライナ人を日本に入れてあげているのだと思います。
　次に、ウクライナの小・中・高・大学生は学校に行けず、ものすごく悲しいのだと思います。私だったら学校にずっと行けなかったら、何もしないでずっとおちこんでいます。なので、ウクライナ人にとっては日本など今、戦争がない国は学校に行けていいな、と、思っているのだとよくわかります。だから私達も学校に行けて良い方なんだな、と思いながら学校へ行っています。
　最後に、私は日本に戦争が来たら怖いのでほとんど毎日きんちょうしています。なので戦争がおきないようにしたいです。だからウクライナ人もがんばってください。おうえんしています。

戦争はなにもうまない

愛鷹小学校　五年
伊藤　颯星

　戦争はなにもうみません。それが、なんの理由があっても、争いだけでは、何も意味がありません。
　最近のロシアがウクライナに戦争をしかけていました。ぼくは、そのニュースを見てこう思いました。
「はずかしくはないのかな。」
　おじいちゃんの家のおくのへやに、亡くなられた人の写真がかざってあって、その中には、自衛隊のふくをきている人がいます。たぶんですけど、まだわかくてなにかの戦争でまけちゃってお亡くなりになったと思います。おじいちゃんもその写真を見るとかなしそうなかおをしています。ぼくはもう、これ以上かなしんでいる人がへるようにねがいます。
　ＹｏｕＴｕｂｅで水爆や機雷を見ました。機雷は、さわったりすると水しぶきを高くあげながら爆発します。自分はおよげないので、み

たことはありませんが、よくサメの映画でちらっと見えているのは機雷です。機雷は日本とアメリカが戦争をしているときにおいたものが、六万個以上残っていて、その時海があぶなかったらしいです。

また地雷もあります。地雷は、どこかの国と戦っているときに、てきにせめこまれないようにうめられたものです。

今でもアフガニスタン、ボスニア・ヘルツェゴビナ、カンボジア、クロアチア、エチオピア、イラク、タイ、ウクライナ、イエメンに地雷が多くしかけられています。二〇一九年に地雷にあたった人は、多い国で、アフガニスタン千五百三十八人、シリアが千百二十五人、ミャンマーは三百五十八人もいるそうです。

ほかの国でも百人はこえています。これだけ地雷があります。どうか、この人たちを助けてあげてください。

だれかを失うのは悲しいし、どうしたら世界が平和になるのでしょうか。

家族と今できるかぎり、話したり、遊んだり自分の家族を大切にしてください。

今の自分も大切にしてください。

戦争の話を聞いて

愛鷹小学校　五年
多々良　絃　介

ぼくの曽祖父母は九十四さいです。戦争を経験したことがあると思い、初めて戦争のことを聞いてみました。

まず、そのころのくらしについて聞きました。曽祖父は九人兄弟で、十一人でくらしていました。ぼくは二人兄弟だけど昔は兄弟が多くて楽しそうだなと思いました。戦争が始まったころは、曽祖母とはまだ結婚してなかったので曽祖母は少しはなれた所に住んでいました。食べ物は農家で野菜を作っていたので、野菜には困らなかったそうです。お米が少なくて、ごはんにさつまいもを切って一緒にたいていたり、小麦も作っていたのでうどんをよく作っていたそうです。すいとんといって、小麦粉をこねてちぎって団子みたいにして汁に入れて食べていたそうです。大おばは、

「おいしくないけどね。」

と言っていました。おやつはなくて、みんなやせていたそうです。ぼくは、毎日アイスやおかしを食べているので昔とは全然ちがうから幸せだなと思いました。

まだ昔は車があまりなく、道路ではありませんでした。みんなリアカーを自転車や動物にひかせて畑まで行っていたそうです。曽祖父の

家では、馬、牛、ニワトリ、ぶたをかっていて、ごちそうを食べるときには、ニワトリをころして食べていたそうです。スーパーやコンビニもないので、自分たちで動物をかってころして食べている生活がぼくには想像できないです。

曽祖父は終戦の二か月前に十九さいで戦争にしょう集されました。その時曽祖父はよろこんでいたそうです。ぼくは戦争は人をころしたり、ころされたりするのが怖いのでよろこんでいたことにびっくりしました。曽祖父は汽車に乗って九州に向かったそうです。長崎に着くころ広島に原ばくが落ちて曽祖父は引き返すことになり、その後長崎に原ばくが落とされました。ぼくはその時に曽祖父が原ばくを受けていたら、死んでしまっていたなと思いました。そしてぼくは生まれていなかったと思うと、奇跡だと思いました。

曽祖母は焼いだんが落ちてくる音は竹やぶがガサガサする音みたいだったと教えてくれました。曽祖母は防空ごうの中でこの音を聞いていたそうです。昼間も夜もけい報がなって、防空ごうに逃げて、音がこわいので布団をかぶっていたと言っていました。昭和二十年七月十七日に沼津大空しゅうがあって、アメリカの発表では沼津の九十パーセントが破かいされたということでした。焼野原だったと聞いて沼津の町中が家ももやされて黒くなっていくところを想像して、ぞっとしました。

曽祖父に

「また戦争に行きたいか？」

と聞いたら

「行きたくない。」

と即答しました。ぼくはよろこんで戦争に行った曽祖父の昔の気持ちと今の気持ちが全然ちがうのでおどろきました。曽祖母は、

「戦争を知らない子は幸せだ。」

と言っていました。ぼくは大事な人が死んでしまうことはとても悲しいことなので、改めて戦争はすごく怖いなと思いました。

曽祖父母が戦争のことについてたくさん話をしてくれたことは、ぼくにとってとても貴重なことでした。その話を忘れずに、命を大切にして生きていきたいと思いました。

ぼくにできること

大平小学校　六年

大村柊登

ぼくは、去年曾祖母に戦争の体験を聞き、自由も権利もない貧しいくらしにおどろきました。そして、戦争中の生活に加え、第二次世界大戦の始まりから終戦が気になり調べました。

まず、戦争が始まった原因です。戦争が始まったのは、一九三九年九月一日にポーランドに侵入したドイツに対し、一九三九年九月三日にイギリスとフランスが宣戦布告したことで開始されました。そして、第二次世界大戦が起こった原因は主に六つあります。まず一つ目は、世界大恐慌が起きたこと。二つ目は、自国ファーストの貿易が行われ

たこと。三つ目は、世界大恐慌において領土や資源を持たざる国が窮地に立たされたこと。四つ目は、ファシズム思想という、個人の利益より国の利益を優先するという考え方が急速に広まったこと。五つ目は、国際連盟がうまく機能しなかったこと。六つ目は、ドイツを封じ込める目的の国際体制が崩壊したことです。このことが自由も権利もうばう第二次世界大戦の始まりの原因です。

そして、第二次世界大戦で日本が起こした出来事です。まず最初に起こしたことは、真珠湾とマレー半島を奇襲し開戦しました。次には、ミッドウェー海戦で大敗し、サイパン島陥落、インパール作戦失敗、レイテ沖海戦で壊滅被害、硫黄島陥落と日本は大失敗でした。それに、さらなる不運がおとずれ、東京大空襲、広島に原爆投下、ソ連が満州に侵攻、長崎に原爆投下などいろいろな被害をうけました。そしてついに、一九四五年八月十五日終戦のラジオがながれました。

ぼくは、第二次世界大戦をくわしく調べてみて、国の資源や領土の問題なのに、国民をまきこみ、多くの死者数をだすということはおかしいと思いました。この戦争は、日本国と他国の問題が原因で始まりました。それなのに、死者数を三百万人以上もだし、国民の人権を無視し無差別に人の命をうばうのは最悪だと思います。でも、その最悪なことをするのが戦争です。なので、戦争はあってはならないと思います。戦争がなければ救える命はたくさんあったと思います。この、人の命さえうばってしまう戦争のこわさを伝えていかなければいけないのです。戦争体験者の方々の思いを、ぼくたちが伝えていかなければならないのです。曾祖母は九十二さいで高齢です。もう戦争のことを思い出すのがつらいそうで、あまり戦争の話をしません。でも、ぼくは去年曾祖母から戦争の話を聞かせてもらいました。その事をどう伝えていくのかがこれからの課題です。そのため、若者にみぢかなSNSで戦争について発信したり、戦争のテレビを見たりしていきたいです。このようなことしかできませんが、この他になにが自分にできるのか考え、戦争体験者の方々の思いを伝えていきたいです。

平和って何だろう

原小学校　五年
佐野龍煌

ぼくにとって平和なことは何だろう
平和のことを考えても
全部は分からないけれど

ぼくにとって平和なことは何だろう
全部は分からないけれど
少しずつ平和がくずれているのは知っている
みんなのおかげで
平和がなくなってはだめなことを知った

ぼくにとって平和なことは何だろう
みんなのおかげで知った
平和を守る人もいる
ぼくも守りたい
みんなのおかげで知った
平和はいいこと

ぼくにとって平和なことは何だろう
みんなが教えてくれた
平和とは
何かいいことが続くこと
ぼくにとって平和なことは何だろう

戦争の悲しさと恐ろしさ

原小学校　六年
笠　原　佑　太

人は過ちを犯してしまう。また、それをくり返すこともある。しかし、戦争より大きな過ちは、この世には無いと思う。国と国による無差別な攻撃、殺人はどの国でもいつでも起こり得る危険なもの。核兵器もその原因の一つになるかもしれない。戦争が無ければそんなものは必要ないのに。ぼくは、兵器を持ちたがる人は、おそわれたり、戦うことを考えてしまう人だと、可哀想にさえ思う。

しかし、戦うための物がなければ攻められた時に降伏するしかない。それなら全世界が何の武器も持たなければ良い。この簡単なことがこれまでに完全にできたことはないからこそ、戦いが起きて悔いて、また戦いが生じる。これが無くなったら平和になると思う人はいる。被害を受けた人やその家族は決して心からよろこべない。過去のことは変えられない。どんなことがあっても未来はいくらでも変えられる。今存在する人全員が周りの人と仲良くするだけでも二度と悲惨な思いをしないかもしれない。

戦争をするという恐ろしいことを実際に知る人は数少ない。その恐ろしさと事実を子供のころから知るだけでだいぶちがう。ぼくの曾祖母は戦争を体で感じた一人だ。今では防災で使う防災頭巾も必需品だったそうだ。学校にいる間でもいつおそわれるか分からない。常におそわれることを意識していたらしい。友達も何人も亡くなってしまったとのこと。人間だけでなく、動物植物の全てにとって一度でなくなってしまうのが戦争。一生辛い思いをしてしまうのも戦争。こんなことが決して許されるべきではない。それでもたった今、戦争で苦しんでいる人がいる。戦う人だけでなく、民間人も全ての罪の無い人たちが危険になってしまうことこそ、最大の世界犯罪だと思う。

戦争を知らない人は、『ガラスのうさぎ』という話を読んでほしい。戦争のはげしさも悲しさもこわさも全部が分かる。実際にあったことだから、共感できるし泣いてしまう。自分にも起きてしまう可能性が

あるからこそ、それをなくす手伝いをしてほしい。みんなに。困っている人を助ける、なぐさめる、応えんすることが自由な平和につながるとぼくは考える。

一人一人がぼ金でも寄付でもいいから、力を合わせて乗りこえてほしい。どうか幸せの手助けをヒントを、あなたから与えてくれませんか。

『えっちゃんのせんそう』

門池小学校　四年
岩澤　昇

えっちゃんは、中国のまん州にうつりすんで、たっちんと仲良く学校に通っていましたが、ソビエトの軍隊がせめてきました。すると、中国の人が、一けん一けんの水道の水を出なくしてしまいました。こんな時えっちゃんは動きます。たっちんの家に赤ちゃんが生まれるので、うぶ湯が必要になりました。えっちゃんはたっちんの家につながるおし入れのかべをこわし、赤ちゃんを助けようとするのです。しかし、中国の人に気づかれそうになったけれども、お父さんも手伝って身をかくし、しんちょうにかべをくずし無事生まれてくる赤ちゃんのうぶ湯をとどけることができました。

ぼくは、すごいなぁと思いながら読みつづけました。けれどすごいのは、これだけではありません。

えっちゃんの家は、びんぼうでした。そこでえっちゃんは、お母さんから十円をもらい、あめを買います。そして、そのあめを売り、次は、家族を助けます。えっちゃんは、たんにんの上原先生に、

「四本、一円のあめはいかが？」

と、たずねると、えっちゃんの手に十二円五十銭をのせてあめを全部買ってくれました。

ぼくだったら、せんそうがこわくておびえていただけだったと思うので、（えっちゃんはやさしいな。）と思いました。でも、全てがうまくいくわけでは、ありませんでした。

えっちゃんとたっちんの家族は、船で日本に帰ることになりました。日本に帰っているとちゅう、たっちんは病気になってしまいました。たっちんはふとんで休んでいました。すると、たっちんがえっちゃんに大事にしていたビー玉をくれました。（大事にしているのにくれるなんて、たっちんへんなの！）と思いました。次の日の朝たっちんの両親が泣いていました。どうしたの？と聞くと、たっちんが死んでしまったと言われました。悲しくて泣いていたら日本に着きました。そして、えっちゃんはたっちんからもらったビー玉に、

「見て、日本だよ！」

と言ってこのお話は終わります。

ぼくは、この本を読んでせんそうのおそろしさと、悲しさを知りました。

今、ウクライナがロシアと、せんそうをしているので、人の命の大切さを教えてあげたいです。

戦争と平和　人々の思い

門池小学校　四年
野木　柚子菜

戦争。それは人々にとって悲しく、ざんこくなことです。わたしも戦争はとてもいやなことだと思います。

さて、戦争とはどんなものなのでしょうか。そして平和な人々にとってどのようなものなのでしょうか。

戦争はとつぜんやってきます。戦争は国をうばいあったり、そのためにつみなき人を戦わせたり、ころしあったり、大切な人をうばわれたりと、とても悲しいことが戦争だと思います。ですが、

「戦争はとてもざんこくだ。」

と思っている人ばかりではありません。たとえばテレビで見るウクライナとロシアの戦争。戦争はかならず計画をくわだてる人がいるはずです。

この戦争は、ロシアのプーチン大とうりょうが計画をくわだてました。

ではどうしてロシアとウクライナは戦争しているのでしょうか。

日本でくらすわたしたちにとって、なぜ今、戦争が起きているのか、どうしてロシアという国が別の国をこうげきしているのかわからなかったので調べてみました。

プーチン大とうりょうは、

「ウクライナはロシアと昔は一つの国で兄弟のようだった。」

と言っています。

でもウクライナがロシアのてき国が多く入っているＮＡＴＯというグループに入ろうとしてたのでいつかロシアがＮＡＴＯからせめられるかもしれないからウクライナがＮＡＴＯに入る前に自分たちの国の一部にしようかと考えたのです。

いま起きているのは、ロシアが世界のルールをやぶってウクライナにせめこみ、力づくで国の一部をうばおうとしているのです。

このように戦争はとても悲しいものです。戦争のニュースなど見たら、

「かわいそう。戦争はぜったいにしてはいけないな。」

と思えると良いなと思います。

では戦争の真ぎゃく、平和はどのようなものなのでしょう。

平和はだれもがのぞむすばらしいものだと思います。

世界で最も安全で、平和な国は、アイスランドです。アイスランドは大体家や車にかぎをかけないのもふつうです。

また、第二次世界大戦以来、軍をもっていないほど平和な国なのです。

また、日本も世界で十番目に平和な国です。

このように戦争はとても悲しく、ざんこくなもので、平和は人々のだれもがのぞむ、すばらしいものです。これからわたしたちは平和を大切にし、国のことも大切にしたいです。

戦争を知る

門池小学校　四年
二見映舞

わたしは、戦争のことを何も知らなかった。そこで、夏休みに『はだしのゲン』というアニメを見て、いろいろなことを知った。

太平洋戦争では、広島県と長崎県に原ばくが落とされたことを初めて知った。原ばくは、多くの人の命をうばう怖い兵器だ。原ばくで多くの人がやけどを負って皮ふが溶けてしまったり、ガラスがささったり、体が溶けてなくなったりした。運良く助かったとしても、火事で亡くなったり、栄よう失調で死んでしまったり放射線でひばくして病気になることもあった。わたしは、アニメを見て、なぜ戦争が起きたのか不思議に思ったので、調べることにした。

太平洋戦争は、日本がハワイをきしゅうこうげきしたことから始まったと知った。その時のこうげきで日本は六十四人亡くなって、アメリカは民間人をふくめ約三千五百人亡くなった。わたしはおどろいた。日本が始めた戦争だったからだ。

もっと戦争のことを知りたいと家族の話を聞いた。わたしのひいおじいちゃんは、戦争でビルマに行った。ビルマでの戦争はとてもはげしくて、同じ部たいの人はひいおじいちゃん以外はみんな死んだ。ひいおじいちゃんは、もう戦争の話をしたくない、とよく言っていたそうだ。きっとそれほど辛い体験だったのだろう。そしてひいおばあちゃんは東京に住んでいたけど、空しゅうがひどくて沼津ににげたことがあったと言っていた。

今は、食料や家、学校もあるけどそのことを当たり前と思ってはいけない。戦争がはじまったらあっという間になくなる。だからわたしは戦争をしたくない。大切な人や家族を失いたくないから。

今ウクライナとロシアが戦争をしている。わたしと同じ年の子が、毎日こわい思いでくらしているかもしれない。そう考えると一日も早く終わってほしいと思った。

戦争のことを知ることで前よりも強く戦争をしてはいけないと思った。

八月十五日

第一中学校　一年
松田成未

私は八月十五日で十三歳になりました。

しかし、この日は「おめでとう」と、気軽に言える日ではありません。「戦争」という悲しい出来事を思い出す日だからです。戦争が終わって七十七年になります。この間、私を含め、八月十五日に生まれた命がたくさんあります。この日が「おめでとう」と言える日になっ